

ホワイトヘッド, アン『記憶をめぐる人文学』三村尚夫訳, 彩流社, 2009, 2017.

- ・「集合的記憶」は、二十世紀初頭に学問的な研究対象としてあらわれた。モーリス・アルヴァックス『記憶の社会的枠組』（1925、『集合的記憶について』（1992））、集合的記憶（1950）、後者が1980年に翻訳された際に大きな話題を集め、ヨセフ・ハイーム・イエルシャヤルミ『ユダヤ人の記憶 ユダヤ人の歴史』（1982）とピエール・ノラ『記憶の場』（1984-1992）によって方向づけられ、ジェイムズ・ヤング『記憶の手触り』（1993）、ジェイ・ウインター『記憶の場、哀悼の場』（1995）などが出版。（170）
- ・アルヴァックスの思考における、師アンリ・ベルクソンの影響について。ベルクソンは、過去の経験は記憶によってすべて完全に保存されている記憶モデルを主張したが、アルヴァックスは、過去の回想は部分的に不完全であり、記憶する能力は内的活動ではなく、古い友人と会うなどの外的刺激によって以前の経験が目覚めるというモデルを主張する。メアリー・ダグラス曰く、アルヴァックスの記憶モデルは、「あちこち散らばった小さく不鮮明な過去の断片を基にしている」のであり、過去を再現するというよりは現在においてそれを再構成する活動である。（172-174）